

# 經濟論叢

第十四卷 第六號

故名譽教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学=社会科学的認識手段論の 問題点……………	大橋隆憲	1
資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(二)…	吉村達次	17
急速税務減価償却をめぐる 所得税会計の保守主義……………	高寺貞男	37
ヘンリ・ジョージについての一考察…	北沢康男	55
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究……………	中山大	68
神戸正雄先生による 再保険特約方式の輸入……………	佐波宣平	85

## 記事

神戸先生御逝去……………	91
追憶文……………	96

新村出	井藤半弥	本庄栄治郎	小島昌太郎
石川興二	嶋川虎三	大谷政敬	小山田小七
堀江保蔵	島恭彦	松井清	

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

## 追憶文

## 神戸君を憶うて

新村 出

神戸博士の学徳や業績や人格のことは、今更私がのべる要もないから、ただ個人的な、愛慕の情を筆にすることに限りたい。

同君と私とは、昔々、一八九〇年代における東京本郷時代の一高の一級上下の同窓だった。一高の卒業、東大の卒業、生誕の年、たった一年の相違だけ。私は明治九年（一八七六）秋の山口県生れ、君は翌十年春の名古屋生れ、相共一高に学び、君は一部の法科志望、僕は同部の文科志望、科や級も少しちがったから、倫理講堂で一所になったり、寄宿寮の同室の名古屋の郷友を訪うて来た君を識ったことはあったわけだが、本科の一年か二年かになってから、中隈敬蔵講師の経済原論を同聴した縁に由つて、毎週一度二時間同席した位なものに止まり、出欠を調べるために姓を呼ばれるので、お互に顔をおぼえあつた丈だった。法科志望の菊地駒次とか、松岡欣平とか、松岡国男、後の柳田、松本丞治（晩年商工相）、それらの人々とは相知り、

今まで深く相識り、親交尽きぬのは、元々文科的な柳田君くらゐなもの。そして経済学を共に聴講したといつても、元来その

ころの必修科目だった経済学を、当時、明治二十七、八、九年ころ、会計検査院の部長あたりを勤られた中隈先生（佐賀県出身で、後には院長に進んだ人だと、最近高田保馬君に、今回の神戸君の告別式のときに聞いただけで、閩歴等は全く知らない）が、経済雑誌社（私の先輩の旧幕系の史学者田口卯吉博士の経営であつたかと憶える）の出版で、原著者の名も、原書そのものも全く知らなかったが、とにかく何人の訳かも今は忘れてしまつたが、とにかく其の訳書に即して、誤訳などを一々明細に指摘しつつ、懇篤に祖述された。アダム・スミスとか、スチュアート・ミルとか、それからマーシャルとか、いろいろな名だけは憶えた。その留学生になつて伯林大学や民頭大学などに、専門以外の弥次聴講を密かに試みた際、シュモラー教授等の名も、ましてやマルクスなどの名も、各教科書には出てこなかったから、その原書は、けだし英米の経済学入門書であつたのだと信ぜられる。

その中隈先生の教場では、法文志望の一部学生が同席し、一級前後の差のある連中が、経済学の初歩を、神戸君と同席して聴講した旧縁は、親疎の間柄はそれを別として、とにかく深遠なものがあつたので、今回願して甚だなつかしい。

かくて、神戸君は、私より一年後の明治三十三年（一九〇〇）東大卒業後、程なく、当時まだ新設間もなかつた京都帝国大学の法科大学の助教授に登用されたので、私は東大文科の国語研

研究室の助手から講師、三十五年（一九〇二）東京高師、東大文の兼任助教から、四十年（一九〇七）京大助教としてドイツに留学中、上記の松本や、松岡を始め、その他、川名とか上杉とかの名は、度々きいたが、神戸の名は全くきかなかつたから、同君の留学とは、相前後したのかも知れない。小川郷太郎はミュンヘンに留学中で、一度出遇った。

それはさておき、明治四十二年（一九〇九）春、私が帰朝して教授に昇任してから凡そ一年ほど経つてから、付属図書館長に兼補された時、神戸君は、法科大学の図書主任を勤務中であつて、当時の総長たりし菊地大麓（前文相、後に枢府の顧問官）から、神戸君と私とを招致して、三人で、図書館の新旧両館を巡覽しつゝこの頃、とかく不円満だった中央図書館と、法科（むろん経済と分離遠き以前のこと）法科（申さば法経両科）との圖書の購入方や処理方や整理迅速などが、うまく（具合が円滑にゆかず）折合が良くなかつたらしかつたのを、適当に調節すべく配慮され兩人に道を講ぜよとの沙汰に外ならなかつたが、こつちは初心者で新参者だつたから、まあ宜しい様にと、我を折り、頭張りもせず、どうやら軌道にのぼせ得たらしかつたが、一に温厚、謹厳かつ円満だった神戸君の徳に因つたものだ。

その他、吾々はお互に無為にして化し合つただけで、特に公私折衝したいきさつもなく親しく交際した経過もなく、停年退

職後、二十数年の間、親密に清話した関係もなく、各々の晩年の和敬清寂期に入り、学問上の接触もなくして今日に至つた。たつた一度、河原町二条上るの簡居の三階に、或る夏の日か、病臥中の君を尋ねた思い出があつた。家庭相互の交際も開けずして、この春に及んだのであつた。

所が、今年の晩春五月、しかもメーデーの好天氣に、神戸君ご夫妻と、令嬢令婿のおふたりとの厚情に由つて、東山に新開のドライブヴェューの清遊に招待されて、新緑の瑞々しさと、四方の展望の快割淵とを、喜ばせていただき、その上、琵琶湖畔の一旗亭において、湖上のヨットの白帆を見ながら、春風に浴しつゝ、旧を語り、新を談じ、空前絶後になつてしまつた清興の午餐をいただいた思い出は、到底永く尽きまい。

君が京都文人連盟の会長を米軍の総督から罷めさせられたその後継を僕に委任され、初めて君の筆蹟の非凡なるを建仁寺における展覧場で見て、大いに恥入つたことは、その席上で語つたが、大正三年（一九一五）、僕が朝鮮寺内総督を公用で尋ねた時、寺内伯から君の経済政策の卓見を大いに賞揚された快談をすることを忘れておつたのは、ほくの大大不覚だったことを悔ゆる次第だ。